索、引揚げるまでの約一年の労苦はこの位で終る。

夫は召集、子供二人は誘拐され

北海道　種藤はるの

昭和十三年満鉄大連埠頭に勤めていた叔父を頼って、主人種藤芳太郎と私は大連に移住し、満鉄に入社しました。

主人は叔父の力添えに感謝しておりましたが、その叔父が病気で大連病院に入院、主人が上司に看護を許され、懸命の看護の甲斐もなく帰らぬ人となってしまいました。

最後まで主人が看護ができたのがせめてもの心の償いと思います。

社宅を申し込んでありましたが仲々割り当てがなく岡安宅に同居しお世話になっておりました。主人は夜間の語学校に通い十八年に中国語三級の検定試験に合格し職員に昇格し喜び合いました。

その頃満州でも空襲が激しくなり、町内では防空壕を掘り防火用水のバケツ訓練をモンペ姿で女も時々やりました。

夜は黒いカーテン、蛍光灯なんかなかった時代で電球に被いをし外に明りが洩れないようにしたり、ガラスには破損防止に紙をX型に貼ってB29の空襲に備え、綿を入れた防空頭巾を被り、非常食を入れたリュックを背負って避難するのでした。この頃満鉄の社員にも召集令状が来て、残った家族同志社宅に集って共同で食事を作って生活する人もおりました。

食糧は配給、衣類は点数制となり、不自由な生活でした。主人は十九年三月十二日に極秘で入隊せよとの召集令状でした。

見送りもできず、家の前で静かに別れを惜しみました。やがて召集された主人から、牡丹江省綏芬河の部隊に入隊したとハガキが届き、二十年五月頃面会ができることを知り、綏芬河駅に良樹を背負い、澄子の手を引いて、もう一人の奥さんと一緒に部隊に行って、面会を申し出ましたが許可にならず、旅館に三泊し、

再三面会をお願いしやっと許可をされ主人ともう一人の兵隊さんが旅館に来て一時間くらい面会ができて感涙したのでした。

これが主人と子供達の最後の別れとなったのでした。戦況は激しくなりB29の空爆で大連港近くのコンクリートで造った防空壕に避難した人達が大勢死んだと聞きました。

やがて終戦となり召集された男達は戻って来ましたが主人は帰って来ません。治安は悪くなり、私は女の姿では外に出れないので髪をバリカンで五分刈りにして主人の訓練服を着て買物などしたものです。

ソ連兵が大連に侵攻して酒を呑み女を出せと大声で怒鳴り恐ろしくて二階のお宅に隠れたりしたものです。

やがて治安も序々に治まり、満鉄もソ連邦の管理することとなり女性も勤めるようになったので二階の岡本さんの話で管理課に勤める事となった。その内社宅を中国人に渡すことで桜花台の住宅に隣組同志で同居することとなり、年老いた金子さんと同居することになった。

その頃職が変りソ連漁網に勤めることになり澄子五歳が小さい良樹一歳の面倒を見るので、金子さんに迷惑をかけないようにと言い聞かせて私は働きに出ておりました。

金子さんから会長に一緒の部屋は大変だと話したのでしょうか、違った人のところへ引越ししました。数日して「カンコロ餅」を買って子供の喜ぶ顔を思い浮べながら帰ったら子供は二人共おりません。

私は気が狂ったように、血まなこになって探しました。次の日も勤めを休んで遠くまで探しました。又紙に書いて電柱に貼りましたところ脅迫状が来て、三千円持って来い、子供は渡すと、指示されたところに暗い中を一人で行きましたが誰も来ませんでした。

中国人に聞き歩き、写真を見せて、密偵に頼んだり色々手をつくしましたが子供の行方は分りません。気が狂いそうな毎日が続く。

昭和二十一年十月引揚げが始まり名簿作りの時で残念でなりませんでした。

私は一人では日本に帰れない。一人で残って探すつもりで、名簿にはのせませんでした。留守家族は早く帰れるのでしたが。

何度目かの引揚げの時、福田会長が今迄探しても見当らないのだから、先に主人が帰っているかも知れないから心残りでしょうが。妹が職場で引揚げたので、その分として帰ったらと言い聞かされ、帰ることとしたが子供達の着替えを入れ、黒パンを入れたリュックを背負いやっとのことで秋田の生家に帰りました。

七十五歳の祖母に可哀想にと泣かれて困りました。主人はまだ帰っておりませんでした。馴れない農業を手伝いながら、子供達はどうしているだろうかと、当時の姿が心から離れることはありませんでした。

主人はソ連に抑留され重労働をさせられ二十三年十二月舞鶴に上陸しました。私や子供が出迎えに来ないので、義姉からそのことを知らされ随分落胆したという。

暫くして主人が帰還したことを知り、主人の実家に帰りました。私は農業を手伝い、主人は営林署の仕事で山に行き働くことになりましたが子供達のことは忘れません。

尋ね人で新聞に出して貰いました。二十五年に旭川の農機具の工場に職を変え、引揚者団体に入会し子供を探しました。五十三年に主人は亡くなりましたがさぞ心残りであったと思います。

我々は人生の大半を誘拐された子供の安否を気遣いながらの生活でした。こんなことが二度とあってはなりませんことを永く〳〵後世に伝えたいのであります。

子供達が生きていて、この手記を読んでくれて、連絡がとれたならと思います。

このことについて情報をお持ちの方はぜひご連絡をおねがいします。